

研究委員会企画シンポジウム

「教育心理学研究」の方向性とあり方を考える

——最近の動向を通して——

司会者	寺田 晃(東北大学)	
	藤永 保(お茶の水女子大学)	藤永 保
話題提供者	吉田 章宏(東京大学)	
	坂野 登(京都大学)	
	松田 惺(愛知教育大学)	
	田畑 治(名古屋大学)	
指定討論者	三浦 香苗(千葉大学)	
	曾我部 和広(杉並第一小学校)	
	伊藤 武彦(和光大学)	
	波多野 誼余夫(独協大学)	

趣旨

寺田 晃

「教育心理学研究」の方向性とあり方を考える——この課題は、教育心理学が人間の教育という価値の形成を目指す営みに関与する使命を含むために、従来にも各所で論題として取り上げられてきた。しかしながら、研究領域が分化・拡大し、様々な事項が専門的に深く検討されるようになった教育心理学の最近の動向からすると、単に教育に貢献するという意味あいからだけではなく、科学としての存立と発展という観点で教育心理学研究を吟味し、改めてその方向性とあり方を問い直してみなければならぬのではないかと考える。またその点では、学会機関誌としての「教育心理学研究」の方向性とあり方についても同様で、省察・検討が必要である。

本シンポジウムは、以上のことを起点として、「教育心理学研究」——研究そのものとしてと、研究機関誌としてという両面の意味から——の方向性とあり方を論じるものである。その展開として、当該論題について教育心理学研究にたずさわる者がもつ一般的見解をまず問うこととした。次いで、教育心理学研究はどのような点で興味ある科学であるのか、面白さの所在を論じると共に、教育心理学研究で取り上げられてきた事項や内容は、事実の世界をいかにアプローチしていたか、さらにそのような研究内容は、教育の営みにはどの程度どんなふうに関与しているかの実践性、などを論じることとした。そして発達、教育、臨床その他の各領域を含めて、「教育心理学研究」の今後の発展としてあるべき姿を論じたいと考える。

本シンポジウムは、元来研究委員会の発案と企画にかかるものであるが、『教育心理学研究』に対して一般的な学問分科としての意味と同時に日本教育心理学会の発行する学会誌としての特定の意味をも含ませているという趣旨があり、そこで編集委員会を代表して私も司会の一翼を担わせて頂くことになった。その点では、『教育心理学研究』誌に関して必ずしも積極的・主体的に何らかの改革案の提示を行いたいというのではないが、研究委員会の資料にみるように、本学会誌に対してさまざまな批判や疑問があることは承知している積りである。編集委員会としても、当然現状に百パーセント満足しているわけではない。

新任の編集委員から、委員会の席上でよくきかされる意見は、原著と資料の区別が明確でない、採否の基準をどのように定めているのかよく分からないというものである。何れも尤もである。従来は、何となく原著論文としてはどこかに欠陥のあるようなものが資料に廻されるという観念が強かった。これには原著のほうが多くの紙数を許されているという事情も働いているのだろう。しかし、資料には資料としての独自の意義を認めるからこそ区分を行うのだとすれば、両者に価値の差を分けるのは好ましくないし、その意味では枚数の区別も考え直すべきではないかと思われる。また、そう考えると、資料は不十分でも発想に独自性があるといった論文をどう扱うべきかも問題であろう。そして、これらは結局審査基準が常識的なもの以外には何もないという問題につながっているのだろう。

本学会誌は、しかし、少数の個性的な研究者の主張に基づいて創刊されたものではない。きわめて多数の会員の総意によって運営されている以上、妥協的ではあっても、結局「柳は緑、花は紅」という方針でやっていくより他はないのだろう。だから、いろいろな特色をもつ論文がそれぞれの価値を正当に評価されるというのが、望ましいあり方のように思われる。そうであればこそ、異議申し立て条項を含めた審査規程を制定・公開することに踏み切ったのである。

しかし、1つだけ苦言を呈するとすれば、現状では資

料はいわずもがな原著といえども、余りにも小じんまりとまとまった論文が多すぎるのではないだろうか。これは、学会誌が必然的に業績作りの場にならざるをえないというところから、ある程度は止むをえない。しかし、それにしても、何らかの原論文に対して多少の実験操作上のバリエーションを施して器用にまとめたというのが標準では情ないと感じられてならない。大学院生の懸賞論文でも募集したら、あるいは破天荒の発想も生まれるのかななどと、らちもないことを昨今は考えている。

「教育心理学研究」の動きを問う

吉田 章宏

はじめに

研究委員会では、このシンポジウムのために、学会員の一部の方々に、『教育心理学研究』の方向性とあり方を考える」と題する、自由記述による、アンケート調査を行った。回答者は研究委員会委員から個人的に依頼するなど、この問題に関心を持ちご意見をお寄せいただけると思われた学会員の中から様々な方々をお願いした。回答者に、統計的な意味で、標本代表性はない。この問題をめぐってのお考えと考え方について、お教えいただくという趣旨のものである。結局、合計39名の方から熱心なご回答をいただいた。「三人寄れば文珠の知恵」とか、これらの方々のご回答を繰り返し読ませていただき、そこから、本シンポジウムへの貴重な示唆を学んだ。それをここで、会員の皆様と共有することとしたい。「教育心理学研究」のあり方を考えるヒントとして活かしていただきたい。

以下、スペースの都合上、すべて電文体で記す。

I. 日本における、教育心理学の研究の現状と将来の展望について

問い「1、教育心理学は、日本の教育に対して、どのような独自の貢献をなして来たとお考えですか。今後、どのような貢献をなすべきでしょうか、また、なすことができるでしょうか。そのためには、どのような研究が、どのような研究方法によって、なされるべきでしょうか。お考えを、お書き下さい。」

「独自の貢献」していない、あまりなかった。／問題意識が外国の輸入品である。現場から発していない。それぞれのパラダイムに縛られ、日本の教育という視点に欠けていた。「現代の病める教育」にたいし無力に近い。一般的説明的知識を提供しても、現場の具体的問題の解決に寄与しているとは受け止められていない。研究者に日本の教育問題への関心が欠如している。

いや、貢献している。自信を持つべきだ。／こども理解、発達理解、が教育にかかわる人々の中で生きている。

育児、保育、教育のありかたに影響を与えている。諸外国の発達理論の紹介と日本での検証がある。こどもの学力の向上をもたらす教育方法の改善がある。部分的に貢献してきた心理学的技法がある。教育を科学的に明らかにしてきた。

教育心理学者の意見を反映させる場、現場と研究の協力できる研究体制、現場に伝えていく努力が必要。役立つ知見があるのに、現場で知られていない。現場教師が役立てようとしているか、が問題だ。用語の問題がある。広報活動を考えるべきだ。

現代的な意味で、「教育心理学の不毛性」論議をすべきだ。その中に、教育心理学が現実の教育に反映されない日本の実情も問題として含めよ。

実際の教育現場から問題を吸い上げた形の研究が望まれる。現場の先生の問題意識と知恵を生かした共同研究を。教育場面における学習の理論化が必要だ。実践に役立つ研究を。実践の変革への貢献を。長期的な研究を。授業や教材を直接対象とする研究を。保育実践、教育実践の分析を。環境の変化に伴う、発達上の問題を組織的に研究すべきだ。他の社会事象との関連のなかで、教育を科学的に扱う研究を。実験室方法への偏向が強すぎる、工学的発想を。

形式にとらわれない論文がもっとあってよい。研究方法は、諸方法の併用が望まれる。多少粗い方法でも良い。豊かなアイデアに訴えて、教育現場をアッと驚かせるような研究領域を創造せよ。少数の事例による問題の明確化、実験的手法による一般化の組み合わせを。大きな変数を大胆に取り上げ、現場で研究せよ。現場教師にも面白い研究を。

問い「2、教育心理学は、日本の心理学全体のなかで、どのような独自の貢献をなして来たとお考えですか。今後、どのような貢献をなすべきでしょうか、また、なすことができるでしょうか。そのためには、どのような研究がなされるべきでしょうか。」

心理学全体への貢献という視点が必要か。教育心理学の定義が分からない。教育心理学は心理学全般にわたる、この問いはトートロジーだ。教育心理学と心理学とが区別できただろうか。独自性にとらわれないほうが良い。

教育心理学の存在自体が心理学に大きなインパクトを与えた。その存在により心理学が発展した。かなり重要な役割を果たした。教育への貢献ということが新しい研究スタイルを生んだ。動物や器官でなく、人間の心を扱う点で貢献した。しかし、独自性の自覚に至っていない。「人間の心理」を基礎に置こうと努力してきた。教育と発達に関する部分で貢献あり。教授・学習と発達の分野で特に充実した研究がある。発達のメカニズムの解明に